

## 中世初期のリテラシーと、初期カロリング王文書を書くこと・読むこと

梅津教孝

### はじめに

西欧中世のリテラシーに対する関心は、20世紀後半に大きな高まりを見せて今日にまで至っている〔5, 6, 24〕。しかし同時に、オラリティーに対する関心も高まっている〔10, 11, 25〕 ことにも注意を促したい。文字史料に多くを依存せざるをえない歴史学にとって、オラリティーはやっかいな問題ではあるが、蔑ろにはできない問題でもある。ここでは、オラリティーと密接に関連する音にも注意を払いながら、メロヴィング期およびカロリング期、とりわけ両王朝の移行期である8世紀のラテン語の読み書きに関する問題に焦点をあて、当該時期のラテン語それ自体のあり方とその読み書きに関する研究状況の簡単な紹介を行ない、最後にラテン語リテラシーの具体的な現われとしての、初期カロリング王文書における、ラテン語を「書くこと」と「読むこと」についていくつかの問題を提起したい。

### 西欧中世初期の言語状況

ローマ帝国における公用語がラテン語であったことは周知の通りである。この状況は、ゲルマン民族がローマ帝国に侵入し、そこに彼らの王国を築いた後も、基本的に変化することはなかった。このことは、中世初期の史料のほとんどがラテン語で書かれていることを想起すれば十分であろう。しかし一方で、全てのゲルマン人がラテン語を受容し、これを自由に用いることができた訳ではなかった。旧西ローマ帝国にできたゲルマン人の王国においては、圧倒的多数のラテン語の話者と、ごく少数のゲルマン語話者がいたのだと考えられている。

その一方でラテン語自体の死語化が進行しつつあった。これは、読み書き能力の獲得にとって不可欠な学校教育の場が、古代末期以来消滅し始めていたこと、その結果として、書き言葉の存在によって一定の規制がかけられていた話し言葉としてのラテン語が大きな変化をこうむり、最終的にロマンス諸語が誕生することによって、これらの言葉の話者にとっては、ラテン語は誰の母語でもない言葉になってしまった〔2, 3〕。その結果、地域による差はあるものの、ゲルマン人の王国には、ゲルマン語、衰微しながらもまだ命をもっていたラテン語、そして新しく生まれつつあったロマンス語の、3つの言語群があったことになり、このことがこの時期の言語状況を複雑なものとしている。

フランク王国でいつラテン語がロマンス語に変化したのかという問題は20世紀を通じて取り上げられてきた〔17, 12, 19, 21〕。近年の研究では、伝統的なラテン語からロマンス語への移行の問題のみならず、これに発音〔26〕も考慮されるようになっている。例えばライト〔28〕によれば、7世紀のガリアにおいては、*virgo*の変化形である*virginem*、*virgine*、*virgini*はすべて同じように発音されていたという。しかし一方で、口頭によるラテン語のこ

コミュニケーションは十分に果たされていたとバンニヤールはいう [3, 4]。このような状況の中、イングランド出身のアルクインによるラテン語の「改革」が行なわれた。彼の「改革」は正書法のみならず発音にまで及んだ。彼が範とした発音は、言葉の自然な変化によってフランク王国内で行なわれていた発音とは大きく異なっていたため、彼による「改革」は口頭によるラテン語のコミュニケーションを甚だしく阻害することとなり、結果としてラテン語の死語化を促進し、書き言葉としての中世ラテン語の成立を促したとされている [3, 28]。

このように、古代末期からカロリング期の始めにかけてのラテン語を巡る状況は、発音の変化、ラテン語の死語化の進行、それに代わる新しいロマンス語の萌芽など、他の時代・地域と比較して、かなり特異なものであったと行うことができよう。

### 中世初期のリテラシー —ロザモンド＝マキタリックを中心とする研究成果—

中世初期のリテラシーに関する研究は、ロザモンド＝マキタリックによって大きな進展を見た。マキタリックは、1989年にカロリング期におけるリテラシーに関する包括的な著作 [13] を発表する一方で、この問題に関心を持つ研究者たちを組織して論文集を出版するなど、中世初期のリテラシーに関する中心的な研究者である。彼女の問題関心は、中世初期のリテラシーが教会エリートに独占されていたとする伝統的な見解に対して、これがより広範な層にも広がっていたことを主張しようとするものであり、1989年の著作で検討されている分野は、統治行為、とりわけ法の分野における書かれたものが果たしていた役割、王の文書局以外の場所（スイスのザンクト＝ガレン修道院）で作成された文書、書物の作成と所有、そして修道院の図書室、そして俗人のリテラシーである。彼女の仕事に対しては、例えばリヒター [22] による厳しい批判があるものの、俗人の、それも特に女性のリテラシーのあり方に高い評価を与えていることは [13, 16] 特筆すべきことであろう。さらに1990年に出版された書物 [14] においては、多くの研究者をまとめてアイルランドやアングロ・サクソン社会から、ユダヤ人社会そしてビザンツ社会など、非常に広範な地域のリテラシーのあり方を提示してくれている。ここでは、ローマ期とメロヴィング期の書く文化の連続を主張するイアン＝ウッド [27] の、そして、カロリング期の俗人のリテラシーが社会の上層では非常に高く（アクティヴ＝リテラシー）、一方下層でも、自らは文字を操ることはできないまでも、一定の書式のものなら理解することができる程度のもの（パッシヴ＝リテラシー）は有していたとする、ジャネット＝ネルソン [18] の研究が注目に値する。

### 初期カロリング王文書を書くこと・読むこと

ここで言う初期カロリング王文書とは、8世紀後半に発給されたものであり、作業のための素材として、781年にシャルルマーニュがフルダ修道院に出した文書 [1-b] を用いる。この文書をその前後100年というタイムスパンの中で見た場合（7世紀末のメロヴィング王ヒ

ルデベルトの文書〔1-a〕と9世紀末の東フランク王ルートヴィヒ2世の文書〔1-c〕）、書体とテキストの書き方という2つの点での変化が注目に値する。書体の変化は、クルシーヴァから文書用小文字というどちらかといえばカロリング小文字に近いものへの変化であり、テキストの書き方は、単語と単語の間にスペースを挿入しないスクリプトゥーラ＝コンティヌアから、現在の書き方に近いスクリプトゥーラ＝ディスコンティヌアへの変化である。クルシーヴァといいスクリプトゥーラ＝コンティヌアといい、これらは共にローマにその起源を有しており、それが変化しているということは、ローマ的なものからの離脱がここで行なわれていたということをご想定することができよう。とりわけスクリプトゥーラ＝ディスコンティヌアの出現が、ラテン語を母語としたことがないアイルランドであったこと〔23〕を考慮するならば、初期カロリング王文書は、文字もテキストの書き方も、ローマ的な伝統をすでに継承し得なくなりつつあったことを示していると言えるのではないだろうか。スクリプトゥーラ＝ディスコンティヌアが実際にどのようにして書面に実現されていたのかについては、いまだ解明されなければならないことは多いが、ここではこれらのことが、8世紀におけるラテン語の大きな変化の中で生じた可能性を指摘しておきたい。

今一つ、西欧中世が基本的にオラリティーが支配する世界であった〔11〕ことを考えるならば、王文書と音という観点も重要であろう。そして王文書が口述筆記によって作られ、8世紀のラテン語の音が古典ラテン語の音と同じではなかったという立場に立つならば（先に述べた*virgo*の3つの変化形がすべて同じ音であったと考えられていることを想起されたい）、書記が聞いた音について、我々は今少し敏感でなければならない。名詞の格を決定する単語の最後の文字が必ずしも明確に発音されないという状況下で、書記は然るべき形を選択しなければならず、ここに書記のラテン語リテラシーの現われ方の一端を見ることは可能であろう。一方、王文書が現場で用いられる際には、読み上げられること、換言すれば文字が音に変換され、その発音された音が決定的に重要な役割をもっていたのであるから、この時期に書かれたものは、現代のそれとは非常に異なった意味をもっていたと考えるべきであろう。音を中心に考えるならば、そこに書かれている文言は、文法的に正確である必要はなかったとさえ言い切ることができるのではないだろうか。中世初期におけるラテン語を用いた口頭によるコミュニケーションのあり方に関する、より深い考察が必要と思われる所以である。

## 終わりに

西欧中世初期は、書き言葉としてのラテン語それ自体、そしてそのラテン語を音との関係の中で見る時、その前後の時代と比較して特異な時期であったとすることができよう。それは書かれたラテン語が、俗ラテン語という話し言葉の影響を強く受けていること、そしてラテン語自体が死語になりつつあったことと大きく関係している。その意味で、8世紀から9世紀は過渡期であった。文字と音が切り結ぶ関係の程度は、書かれたものの内容によって異なるであろうが、この時代の書かれたものが音と全く関係をもっていなかったと

考えるのは正しくない。音と文字との関係が切れる時、例えば音読から黙読への移り変わりが、社会の中の書かれたものの役割の変化に対応するのであろうとの見通しはできようが、では例えば王文書でのそれはいつのことなのかという問題にはまだ手が付けられていないように思われる。この問題については、歴史学のみならず、隣接諸科学、例えばラテン語やロマンス語の言語学〔29〕、社会言語学その他との協働が、豊かな実りをもたらしてくれるであろう。

### 主要参考文献

1. Steffens, F., *Paléographie latine. 125 Fac-similés en phototypie, accompagnés de transcriptions et d'explications avec un exposé systématique de l'histoire de l'écriture latine*, Trêve/ Paris, 1910. [<http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/indexSteffens.html>]  
     1-a: [http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/Steffens/046\\_tav028.pdf](http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/Steffens/046_tav028.pdf)  
     1-b: [http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/Steffens/061\\_tav041.pdf](http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/Steffens/061_tav041.pdf)  
     1-c: [http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/Steffens/098\\_tav064.pdf](http://www.archivi.beniculturali.it/Biblioteca/Steffens/098_tav064.pdf)
2. Banniard, M., *Genèse culturelle de l'Europe, Ve - VIIIe siècle*, Paris, 1986.
3. Banniard, M., *Viva Voce. Communication écrite et communication orale du IVe au IXe siècle en Occident latin*, Paris, 1992.
4. Banniard, M., Seuil et frontières langagières dans la Francia romane du VIIIe siècle, in Jarnut, J., Nonn, N. und Richter, M. (hrsg.), *Karl Martel in seiner Zeit, (Beihefte der Francia, Bd. 37)*, Sigmaringen, 1994, S. 171-191.
5. Bäuml, F. H., Varieties and Consequences of Medieval Literacy and Illiteracy, *Speculum*, 55 (1980), p. 237-265.
6. Clanchy, M., *From Memory to Written Record, England 1066-1307*, Oxford UK/ Cambridge USA, 1979.
7. Everett, N., *Literacy in Lombard Italy, c. 568-774*, Cambridge, 2003.
8. Ganz, D. and Goffat, W., Charters Earlier than 800 from French Collections, *Speculum*, 65 (1990), p. 906-932.
9. Garipzanov, I. H., *The Symbolic Language of Authority in the Carolingian World (c. 751-877)*, Leiden, 2008.
10. Green, D. H., Orality and Reading: The State of Research in Medieval Studies, *Speculum*, 65 (1990), p. 267-280.
11. Green, D. H., Das Mittelalter – Eine orale Gesellschaft?, in Goetz, H.-W. und Jarnut, J. (hrsg.), *Mediävistik im 21. Jahrhundert. Stand und Perspektiven der internationalen und interdisziplinären Mittelalterforschung*, München 2003, S. 333-337.
12. Lot, F., À quelle époque a-t-on cessé de parler latin?, *Bulltin Du Cange*, 6 (1931), p. 97-159.

13. McKitterick, R., *The Carolingians and the Written Word*, Cambridge/ New York/ Port Chester/ Melbourne/ Sydney, 1989.
14. McKitterick, R. (ed.), *The Uses of Literacy in Early Medieval Europe*, Cambridge/ New York/ Port Chester/ Melbourne/ Sydney, 1990.
15. McKitterick, R., *Books, Scribes and Learning in the Frankish Kingdoms, 6th - 9th Centuries (Variorum Collected Studies Series: CS 452)*, Aldershot, 1994.
16. McKitterick, R., Women and Literacy in the Early Middle Ages, in McKitterick, R., *Books, Scribes and Learning*, XIII, p. 1-43.
17. Muller, H. F., When did Latin Cease to be a Spoken Language in France?, *Romanic Review*, 12, 1921, p. 318-334.
18. Nelson, J., Literacy in Carolingian Government, in McKitterick, R. (ed.), *The Uses of Literacy in Early Medieval Europe*, Cambridge/ New York/ Port Chester/ Melbourne/ Sydney, 1990, p. 258-296.
19. Norberg, D., À quelle époque a-t-on cessé de parler latin en Gaule?, *Annales E. S. C.*, 21, 1966, p. 345-356.
20. Richter, M., Die Sprachenpolitik Karls des Großen, *Sprachwissenschaft*, 7 (1982), S. 412-437.
21. Richter, M., À quelle époque a-t-on cessé de parler latin en Gaule? A propos d'une question mal posée, *Annales E. S. C.*, 38, 1983, p. 439-448.
22. Richter, M., >...QUISQUIS SCIT SCRIBERE, NULLUM POTAT ABERE LABORE<. Zur Laienschriftlichkeit im 8. Jahrhundert, in Jarnut, J., Nonn, N. und Richter, M. (hrsg.), *Karl Martel in seiner Zeit, (Beihefte der Francia, Bd. 37)*, Sigmaringen, 1994, S. 392-404.
23. Saenger, P., *Space between Words. The Origins of Silent Reading*, Stanford, 1997.
24. Schieffer, R. (hrsg.), *Schriftkultur und Reichsverwaltung unter den Karolingern. Referate des Kolloquiums der Nordrhein-Westfälischen Akademie der Wissenschaften am 17./ 18. Februar 1994 in Bonn*, Opladen 1996.
25. *ScriptOralia*, Tübingen, 1987 -
26. Stotz, P., *Handbuch zur lateinischen Sprache des Mittelalters*. Bd.3, Lautlehre, München, 1996.
27. Wood, I., Administration, law, and culture in Merovingian Gaul, in McKitterick, R. (ed.), *The Uses of Literacy in Early Medieval Europe*, Cambridge/ New York/ Port Chester/ Melbourne/ Sydney, 1990, p. 63-81.
28. Wright, R., *Late Latin and Early Romance in Spain and Carolingian France*, Liverpool, 1982.
29. Wright, R. (ed.) , *Latin and the Romance Languages in the Early Middle Ages*, The Pennsylvania State University Press, 1996.